

## 外国にルーツをもつ児童との共生を図る特別活動

ー地域での居場所をつくる学校の役割ー

二宮 孝司<sup>1)</sup>・佛圓 弘修<sup>2)</sup>

広島市立広瀬小学校<sup>1)</sup>・広島都市学園大学 子ども教育学部<sup>2)</sup>

### 要 旨

広島市立A小学校では、「広島市外国人意識生活実態調査」(2012年実施)を踏まえ、外国にルーツをもつ児童との共生を図る特別活動に取り組んできた。家庭での学校への子育て依存度が高くなる現実の中で、自尊感情と多文化共生の学びを基盤とした「A小平和ルール」を児童によって自己決定させ、偏見やいじめを児童自らが克服していく自治的な特別活動の在り様を模索している。学級会活動を通して、外国にルーツをもつ児童が学校全体や地域での居場所をも獲得していく展望も模索し、その効果も徐々に見え始めてきているところである。

キーワード：特別活動，自尊感情，多文化共生，A小メソッド，自己調整力，  
A小平和ルール

## 1 中国残留邦人3世を取り巻く環境

中国残留邦人の多くが居住する広島市のA地区は、学区が西日本最大の公営住宅群で、小学校に在籍している児童全員がここから通っている。25年程前から、中国からの呼び寄せ家族が増え、地域では、「大声で話す」「ごみの捨て方が悪い」「エレベーターを汚す」などの中国人に対する否定的な声が次々聞こえ出した。これは、地域の大人だけではなく、それを日々耳にする子どもたちに大きな影響を与えてきた。

この偏見や否定的な見方を地域から無くすことはとても困難な作業である。家庭や地域にとって教育的影響力の大きい小学校での民主的な関係づくりを教育方針の基盤に据え教育活動を進めてきた歴史がある。

これらの項目を一つひとつ取り上げてみても、社会的弱者の占める割合が高く、「A地区は将来の日本の縮図である」とも言われている。また、外国からの来校者から、「世界のスタンダード」だとも言われた。中国残留邦人2世の生活や教育に対する意識について、広島市市民局人権啓発課多文化共生担当による2012年実施「広島市外国人意識生活実態調査」をもとに中国残留邦人の置かれている状況を挙げることにする。(調査結果の詳細は本稿では割愛する。)

本調査からは、A地区の小学校に通わせている3世の教育に対して、小学校への依存度が高いことが読み取れる。中国残留邦人3世にとって学校での出来事を家族に相談するこ

とは少なく、2世である保護者にとって、なかなか子どもに寄り添うことができない状況があるのである。水内（2019）は「家庭における親・保護者による教育—家庭教育—こそが教育の本命」と述べているが、中国残留邦人の家庭においては、学校が果たす役割は大きいと考える。

学級内のいじめ、保護者同士の軋轢、地域の偏見等の課題に共通することは大きく2つあると考える。一つ目は、「不足感や不安感からくる異質なものの否定」である。自己が安定していれば、異質な他者も受け止めることができるが、不安や不満などの不安定要素があると、異質なものを否定したり排除したりするのではないかと。差別意識や人権意識の低さだけではなく、不足感からくる自己安定や自分の存在を確認するためではないかと思うようになってきた。言わば、承認欲求と自己実現欲求の裏返しではないかと。そこで鍵を握るのが「自尊感情の育成」である。

そしてもう一つは、「正しく理解すること」の機会や経験が不足しているのではないかと。ということである。自分と相手、日本人と外国人、と言うように二面的な見方が、「～に違いない」という思い込みや決めつけを引き起こしている。「～かもしれない」「もし～だとしたら・・・」と言う思考になかなか至らない。目の前の「違い」を、広い世界を見渡し、共通するものなのか、違うものなのか「真実」を見抜いていくための「多文化共生」の学びを通して、より価値のある認識に結びつくと考え。児童の課題、保護者の課題、そして地域課題は、いずれも「自尊感情の育成」と「多文化共生の学び」の2つの側面から切り込んでいくことが共通すると考えた。

### 【指標としての5項目】

この「自尊感情」の育成と「多文化共生」の学びを基盤とした「A小メソッド」の検証を行う上で、とても参考となるのが、吉谷（2005）が整理した「多文化共生の目標」5項目であろう。

- |   |                     |
|---|---------------------|
| ア | しっかりとした帰属意識がある      |
| イ | 異質で多様な文化や他者を受けとめ認める |
| ウ | 属性で差別されず、真実を見抜いていく  |
| エ | 学び合いを通して、全員で高まっていく  |
| オ | 多様なつながりと様々な交流の機会がある |

これは学級集団づくりであり、授業づくりの基本である。中国残留孤児3世を取り巻く学級では、アの「帰属意識」やイの「他者を受け止め、認める」点では大きな課題がある。アとイを克服することはもちろん、ウの「真実を

見抜く」エの「学び合いを通して全員で高まる」そして、オの「多様なつながりと交流の機会」がなければ、たとえ民主的な集団が一時的に達成できても、簡単に差別や偏見に満ちた関係性に立ち戻りかねない。

そこで、この5項目の達成を最終目標として、「A小メソッド」が学びの主体者育成に結びついていく過程を整理していく。

## 2 特別活動の実際

### (1) 「中国へ帰れ」～学級自治につながる学級会活動

「自尊感情の育成」と「多文化共生の学び」を基盤とした取組は、年々成果をあげ大きな偏見や決めつけによるトラブルは減少してきた。それでも、偏見やいじめが完全に無くなることはない。5年前、高学年の学級で「中国へ帰れ」発言が表面化した。

一方で、大きなピンチの場面ではあるが、それを指導のチャンスに変える活動の一つが「学級会活動」であった。その経緯と話し合い後の感想の分析を中心に、民主的な「自治づくり」について実践報告する。

#### ① 「中国へ帰れ」発言のきっかけ

学級で大切なことを決めるとき、中国から編入してきた3人（BさんCさんDさん）と半年前転校してきたEさんの4人が中国語でおしゃべりをして、話し合いに参加していないように感じたFくん（日本人）が腹を立て、「（中国語をしゃべりたいなら）中国へ帰れ」と発言し、4人と大げんかに発展した。

#### ② 発言に至るまでの経緯

半年前に転校してきたEさんに対し、学級みんなで日本語や勉強を教えてきた。中国人のGさんは、同じ女子同士でもあり、誰よりも中国語も日本語も堪能なので大きな期待をしていたが、あまり、Eさんにかかわる様子はなかった。支えたのは、日本生まれの中国残留邦人3世の子どもたち（HくんIくんJくん）であった。日ごとに上達し、日本語も少しずつ話し始め、学級みんながそれを喜んでいた。

そこへ、5年生の終わりから6年生の初めにかけて、中国残留邦人3世3人（BさんCさんDさん）が編入してきた。通訳として活躍したのがEさんであったが、そのEさんは全く日本語を話さなくなり、4人だけの会話が増え、日本人の子どもたちとの距離ができていった。

#### ③ 学級会での話し合い

これまでも、トラブルの度に日本語学習教室の中国人の先生に通訳をしてもらい解決してきたが、個別の対応が中心であった。今回は、担任と学級全員で、通訳の必要がある時は、両方の言葉が分かる児童6、7名が伝え合いながら進めていった。

##### 【主な話し合いの流れ】

- どのような経緯で、この発言が出たのか（事実）
- それぞれが、どんな思いだったのか（気持）
- 何が課題か（判断）
- これから6年生として、どのようにすればよいか（表現）

#### ④ 話し合い後の児童の感想

(Lくん 日本)

話し合いで、中国から来た人たちの気持ちが不安でいっぱいと言うことがわかりました。自分のわからない言葉で言われて、何すればいいのか、何か悪口を言われているみたいな気持ちになるからです。これから、中国の人や外国の人を同じ人間として大切にしていきたいです。

(Mくん 韓国・朝鮮)

FくんがBさん達に言った「中国へ帰れ」という言葉は、Bさん達だけでなく他の中国の人にも悪い影響を与えると今日の話し合いで分かりました。これから、僕たち6年生が良い影響を与えるような言葉を言えるようにしたいと思います。

(Nさん 日本)

まず6年生から「A小平和ルール」の「ひとの国のことについて悪口を言わない」を守って「A小平和ルール」を守っていない下学年がいたら、行動や姿で伝えていく。

(Tくん 残留邦人3世 日本生まれ)

Bさん達は、日本語を言えるようになりたかったのがわかりました。だから、僕たちは教えてあげたいです。

(Hくん 残留邦人3世 日本生まれ)

言っている人は伝えたい人に言っているだけと思ってるけど、ほかの中国に関係している人も、「自分に言ってるのかな」と思ってしまうから、言ったらいけない。

(Iくん 残留邦人3世)

今日の話し合いで考えた事は、言う方は何も考えずに普通に気やすく言うけど、言われる方の方は、その悪口を絶対忘れないと思うので、絶対相手が傷つくことを言わないことが考えられました。中国の人などをもっと大切に思えるようにする。

(Jくん 残留邦人3世)

僕も中国語で話すのは文句ありませんが、大きな声で話すなら日本語で話してもらいたい。小さい声で日常会話程度ならいいと思います。Eさんも、今日先生が「日本語で話して」と言っても、わざと中国語で話しているように見えました。なので、自分で考えて行動してほしいです。

(Gさん 中国)

まずFくんを直すだけじゃなくて、6年生（みんな）も「A小平和ルール」を守れていないから、そこを直していって、逆の立場で考えてあげ、Bさん、Cさん、Dさん、Oさんたちが安心して学校に来れるようにしたらいいと思いました。

(Bさん)

わたしは日本語の勉強をがんばってこれからみんなと仲良くなりたいです。できるだけみんなとけんかをしないように仲良くしたいです。(中国語)

(Cさん)

まず日本語をしっかりと覚えます。そうしたら全てがうまくいくと思います。(中国語)

(Eさん)

みんなとなかよくしたいと思います。4人も日本語が頑張って勉強する。でもCさん達、まだ日本語をペラペラしゃべるのはできません。でも、みんなとしゃべる時、できるだけ日本語を使います。【原文のまま】

## ⑤ 考察

整理をするために、発言のポイントを以下のように整理した。

Lの記録	言葉がわからないと、何か悪口を言われているみたい。
M, Hの記録	他の中国の人にも悪い影響,「自分に言っているのかな」と思う。
Nの記録	「基町平和ルール」を守っていく。
Pの記録	日本語を言えるようになりたかった。
Iの記録	言われる方は、その悪口を絶対忘れない。
Jの記録	日本語で話してもらいたい。
Gの記録	安心して学校に来れるよう・・・
B, Cの記録	日本語をしっかりと覚えます。
Eの記録	みんなとしゃべる時できるだけ日本語を使います。

さらに、吉谷(2005)が多文化共生の視点として挙げた6つの観点をもとに、考察する。

ア しっかりとした帰属意識がある  
イ 異質で多様な文化や他者を受けとめ認める  
ウ 属性で差別されず、真実を見抜いていく  
エ 学び合いを通して、全員で高まっていく  
オ 多様なつながりと様々な交流の機会がある

ア・・・「6年生として」「リーダーとして」という学校内での自分たちの立場で発言している児童が多い。

イ・・・残留邦人3世のH, P, I, Jの言葉からは、切実な思

いが語られている。特にIの「言われる方は、(その悪口は)絶対忘れない」と言われた側の立場で深く考えている。

ウ・・・Fの発言は個人の問題でとどまらず、以前の6年生の姿や後輩たちに影響を及ぼしてはいけないという視点で考えている児童が多い。特に「A小平和ルール」の継承をより意識している。

エ・・・Jの「(日本語で話せることは)日本語で話してもらいたい」という要求は、Eにとっては、わかってはいたけれど、公的な場で友達に指摘してもらい、「みんなとしゃべる時、できるだけ日本語を使います」に結びついている。また、P, C,

D、Oの「言葉でうまく表現したい」という思いが、その後の日本語獲得の動機づけとなった。

オ・・・「学級会」という公的な場で、それぞれが多様な意見を出し合い、一人ひとりが高め合う話し合いとなった。

学校の役割として、教科学習の充実や確かな日本語の習得であるが、特別活動や学校行事の中の自治的な関係づくり、そして、「多文化共生の学び」と「自尊感情の育成」は欠かせないとする。「確かな学力」「多文化共生の学び」「自尊感情の育成」を学校教育の柱と位置づけて、教育コミュニティのデザインを構築していくことが、「人を認める」「人を排除しない」「仲間をつくる」ことにつながると考える。

## (2) 児童会による「A小平和ルール」発信に見る自治の力の育成

「A小平和ルール」とは、平成27年度児童会により発信された4つのルールである。

- 1 「人の体の事では悪口を言わない」
- 2 「人の名前で絶対に遊ばない」
- 3 「人の国のことで悪口を言わない」
- 4 「高学年が下学年にA小平和ルールについてわかりやすく伝える」

初めて、全校に説明された時の様子は、以下のとおりである。

【平成27年6月17日児童朝会の記録】 ※n；不特定児童	考 察
<p>n 1 A小平和ルールについて真剣に考えてきました。この後紹介するので、守っていきましょう。</p> <p>n 2 A小学校に来ている1年生から6年生全員が安心して学校に来れるようにみんなでこのルールを大切にしていきましょう。</p> <p>n 3 次にA小平和ルールがどのようなルールなのか説明します。</p> <p>n 4 これからA小平和ルールについて説明します。僕たちは4つのルールをつくりました。</p> <div data-bbox="256 1375 793 1704" data-label="Image"> </div>	<p>○ 発言した5年生は、低学年の頃は、すぐに悪口を言い、トラブルの絶えない児童ではあったが、児童朝会での発言には成長を感じさせた。また、1年後、前の項で示した「中国へ帰れ」発言のあった学級の児童（Lくん）である。その時、「話し合いで、中国から来た人たちの気持ちが不安でいっぱいと言うことがわかりました。自分のわからない言葉で言われて、何すればいいのか、何か悪口を言われているみたいな気持ちになるからで</p>

<p>1つ目は「人の体の事では悪口を言わない」と言うことです。</p> <p>2つ目は「人の名前で絶対に遊ばない」と言うことです。</p> <p>3つ目は「人の国のことで悪口を言わない」と言うことです。</p> <p>4つ目は「高学年がA小平和ルールについてわかりやすく伝える」と言うことです。</p> <p>n 2 それでは、このルールをみんなで読んでみましょう。僕が先に言うので、合わせて読んでください。(みんなで読む)</p> <p>n 4 この4つのルールがA小学校の「当たり前」にしましょう。みんなでこのルールを忘れないようにしましょう。</p> <p>n 1 みんなから、質問や意見はありませんか。</p> <p>n 1 (挙手した児童を指名)</p> <p>(3年男児) 3年生は喧嘩とかが多いので、このこと(A小平和ルール)を絶対大切にしていきたいと思います。</p> <p>(5年男児) 自分でも嫌なことを言われたことがあるので、このA小平和ルールを大切にしていきたいです。</p> <p>(6年男児) 自分のクラスは悪口が多いので、このA小平和ルールを大切に守っていききたいです。</p>	<p>す。」と中国残留邦人3世の女子に寄り添う発言をしている。</p> <p>○ 発言した6年男児は、中国残留邦人3世の児童で、自分がそのことでいじめられることはなかったが、ここでみんなに話しておきたかったらしい。(担任から)</p>
--	---

### 3 ようこそ先輩～世界なかよし教室「全員会」で語る卒業生Vさん(高校1年生)～

「全員会」は、外国にルーツをもつ児童を対象にした下学年では月に一度、上学年は年2回放課後に実施され、この18年間欠かすことなく実施されてきた。「下学年全員会」は、日本や中国を中心とした文化の継承を目的としてきたが、その延長として、「上学年全員会」は、地域行事の『砂持加勢まつり』で『龍踊り』の披露をしてきた。最終的には、卒業時に、日本と祖国の両方のルーツを大切に生きていってほしいというメッセージを送る会として位置付けてきた。今年は、4年前の卒業生を招いて「ようこそ先輩」として、小学校時代の言葉の壁による悩みや葛藤、中学校での勉強の様子などを振り返って語ってもらった。特に6年生にとって、アイデンティティや自己実現につながる話として関心を持って聞いていた。その時の記録をもとに、分析することとする。



<p style="text-align: center;">記 録</p> <p>※①；世界なかよし教室（日本語学習教室）の指導者</p>	<p style="text-align: center;">考 察</p>
<p>①1 今日「上学年全員会」で、先輩に聞こうと言うことで、Y高校の1年生Vさんに来てもらえました。Vさんは小学校の5年生の2月に日本語が全くわからず学校に行きました。いろんな話が聞けたらいいと思います。</p> <p>①2 6年生はもうすぐ中学校に行くよね。中学校でどんな生活があるか聞きましょう。4年生5年生はVさんが小学校だった頃の話聞いて比べて聞いてください。日本語で自己紹介してください。</p> <p>V1 皆さんこんにちは私は「V」です。私はバレーボール部のマネージャーをしています。 (中国語で自己紹介)(英語で自己紹介)</p> <p>①3 今の高校生活は楽しいですか。</p> <p>V2 とっても楽しいです。たくさん友達ができて先生たちもとても優しいです。</p> <p>(略)</p> <p>①6 小学校5年生の2月にA小学校に来てその時日本語が全くわからなかったと思いますが、当時辛いなぁとか困ったなぁと言う事がありますか。</p> <p>V5 たくさんあります。日本語がわからなくて、授業はわからなかったです。友達がなかなかできなくて寂しかったです。中国人同士の話はしますが、日本人の友達が欲しかったです。</p> <p>①7 思いが伝わらなかった時はどんな気持ちでしたか。</p> <p>V6 中国に帰りたい気持ちや「どうして日本にきたの」「早く中国に帰りたい」と思いました。</p> <p>①8 先生はよく知っています。イライラしてたくさんけんかしましたね。どうして喧嘩になったんですか。</p> <p>V7 それは「中国に帰れ」と言われて、どうしてそんなこと言われたのかイライラしてけんかをしました。みんなが何を言ってるか分からなくて、どう言えればいいのかわからなくてイライラしてけんかしました。</p> <p>①9 言い返せないのが辛かったんですか。</p> <p>V8 はい。</p>	<p>○ 「上学年全員会」で、先輩の話聞くことは初めての取組であったが、高学年で来日した児童も多く、理想的なモデルとしてイメージしやすい貴重な機会と言える。</p> <p>○ 自己紹介も日本語だけではなく、中国語と英語で行いみんな感心した。</p> <p>○ 中国から来日した時は、突然連れてこられ、納得できない気持ちであっただけに、日本語が話せず、自分の気持ちを表現できないことはとても不安であつたに違いない。</p> <p>○ 来日した時、ほぼ同時期に2名中国からの編入があり、また、半年前編入した児童もいたため、常に4人で行動し、会話も中国語であつたため、日本人との会話はほとんどなかった。その際学級でのトラブルになり、「中国へ帰れ」と言われた経緯は、前述でふれたとおりである。</p> <p>○ 「みんなが何を言っているのかわからなくて」「どういえばいいかわからなくて」とあるように、大きな</p>



<p>⑩10 けんかをして覚えたことがありますね。</p> <p>V 9 はい。悪い言葉をおぼえました。</p> <p>⑩11 友達ができないと言っていたけど。</p> <p>V10 もっと日本の友達を作りたい。だって日本の友達が作れるともっと（学校生活が）良くなると思っていました。今は後悔しています。自分は勇気がなくて、先に自分から話しかけることが苦手でした。話す内容もなく、何を話していいかわからなかったです。</p> <p>⑩12 先生は知っています。Vさんは卒業する頃には日本語が上手になって、日本語で言えるようになりました。卒業前の気持ちはどうでしたか。1年前と変わりましたか。</p> <p>V11 はい、変わりました。「卒業したくない」と思いました。「クラスの人ともっと話していれば」とめっちゃ（とても）後悔しました。私は卒業式の時に泣きました。</p> <p>⑩13 運動会で初めてA小ソーランを踊りましたね。</p> <p>V12 とても練習しました。</p> <p>⑩14 なんであそこまで頑張ったんですか。</p> <p>V13 卒業までもう少しだったので、みんなで最後に仕上げようと思って、頑張って踊りました。体育祭（運動会）が終わって、自分がかっこいいなあと思っていました。</p> <p>⑩15 そのことを漢字3文字で言えますか。</p> <p>P 1 「達成感」です。</p> <p>（略）</p> <p>V27 自分の夢を諦めずにとりあえず頑張る、こけてもあきらめないで頑張る。ここでついていけるように今頑張ってください。</p> <p>⑩27 今日は貴重な話を聞かせていただいてありがとうございました。</p> <p>P12 これで「上学年全員会」を終わります。姿勢、礼。</p>	<p>壁は日本語にあることがこの発言からもわかる。</p> <p>○ 日本語が話せるようになったけれど、すぐに卒業するという状況で「もっとクラスの人と話していれば・・・」と後悔や残念に思う気持ちは、小学生にとって強いメッセージとなったようである。</p> <p>○ A小ソーランを踊り終わって、最後に「自分がかっこいい」と思えたことは、まさに「自尊感情」が満たされた一つの経験と言える。この6年生としてリーダーが全員で踊り終える達成感は、小学生にとっても共感できるものであるし、4, 5年生にとっても目標となったに違いない。</p> <p>○ 「自分の夢をあきらめずがんばる」というメッセージは、説得力があった。</p> <p>○ この会の終了後、6年生児童が中国語で話しかけていた。Vさんもうれしそうに話していたことが印象的であった。</p>
--	--

Vさんは、5年前、5年生の2月に来校した中国残留邦人3世で、前の章で、「中国へ帰れ」と言われ日本の子どもとけんかになった児童である。当時のけんかやイライラしていたことをよく覚えていて懐かしく振り返ってくれたが、やはり「言葉の壁」が大きな要

困だったと振り返ってくれた。

10年以上前の児童に見られた「アイデンティティ」を持ってない悩みや「ダブルリミテッド」による学力の壁に悩まされていた姿とは、全く違う。理科の学習や人間関係など悩みはありながらも、自ら克服していく「自己調整力」が育っていると言える。自分の描く未来の姿を信じてチャレンジする姿が読み取れる。この日の上学年全員会での先輩の姿は、高学年にとって「将来のモデル」として自らと照らし合わせていくであろう。

18年前から継続してきた、「自尊感情の育成」と「多文化共生の学び」はすぐに成果が表れるわけではないが、学級や学校の自治の力が支えたことは大きな学校の財産と言える。

#### 参考文献

- ・伊藤泰郎（2013）広島市外国人市民生活意識実態調査 から見た現状と課題について
- ・齋藤ひろみ（2017）外国人児童生徒等教育を担う教員の「加配」－制度を巡る諸問題
- ・齋藤ひろみ（2019）外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発・事業 事例集 モデルプログラムの活用（日本語教育学会）
- ・齋藤ひろみ（2020）外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業 外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修のための「モデルプログラム」ガイドブック（日本語教育学会）
- ・末藤美津子（2017）多文化共生を目指した「チーム学校」の取り組み－カリキュラムマネジメントの視点から－
- ・野沢慎司（2018）「多文化共生を学び合う 配慮と偏見のはざままで」－「内なる国際化」に対応した人材の育成－
- ・水内 宏（2019）「教育学のすすめ」
- ・深山正光（2007）国際教育の研究－平和と人権・民主主義のために－
- ・渡部朋子（2017）72年目からの平和都市－広島の力を生かす街づくりへー街づくりひろしま第29号巻頭言
- ・吉谷武志（2005）多文化共生の街づくり－いのちを育む学び－グローバルにローカルで－
- ・広島市（2005）「広島市外国人意識生活実態調査」広島市市民局人権啓発課多文化共生担当
- ・広島市（2015）「広島市外国人意識生活教育実態調査」広島市市民局人権啓発課多文化共生担当
- ・市瀬智紀（2009）国際理解教育と持続発展教育の地域における展開に関する一考察。
- ・井出孫六（2004）「終わりのなき旅」－中国残留孤児の歴史と現在
- ・植木節子（2008）教科における「国際理解教育」の可能性。
- ・佐藤郡衛（2004）国際理解教育の現状と課題。
- ・菅井陽子（2014）外国人児童の「反周辺化」に関する試み－中国人集住地域における小規模校の事例研究－ 広島大学大学院
- ・瀬川 大（2013）新学習指導要領下で多文化共生に向けた教育を行うために
- ・高桑光徳（2016）『「内なる国際化」に対応した人材育成の重要性』明治学院大学教養教育センター、社会学部編